

## 日本語A「言語と文学」の取り組みについて

教諭 石井光貞

### 1 フルセットの2023年11月試験を終えて

2023年11月の最終試験を終えた本校IBコース3期生の日本語A（言語と文学）平均スコアは、HL（上級レベル）クラスが6.0、SL（標準レベル）クラスが5.5でした。言語A全体の世界平均が4.9であり、日本語A（言語と文学）のみの全体平均がHL5.2、SL5.0だったこと、そしてバウンダリー（7段階評価の規準値）が前年度より厳しく設定されたことを踏まえると、生徒たちは本当によくがんばったと思います。

本校の生徒としてはじめて（IBコース1期生が）最終試験に臨んだのは2021年11月、コロナ禍中のことでした。本来、HLの生徒は4種類、SLの生徒は3種類の評価課題を受けなければなりません。世界各地で教育活動が停滞するなか、特別な措置として「試験問題2」が実施されないこととなりました。これは2022年11月試験（IBコース2期生受験）まで続きました。「試験問題2」はそれまでに学んだ文学作品についての試験です。詳しい説明は省略しますが、「学習した2つの作品が社会に対する批判をどのように伝えているか論じなさい。」（2023年11月試験）のような問いが複数提示され、その中から1つを選んで論述します。国語の教員でも準備をしておかないと書けない問題です。IBコース1期生と2期生はこのように難易度の高い問題の試験対策をせずに他の試験対策に時間をかけられました。（もちろん、試験問題2が他の評価課題と比較して難易度が高い、という意味ではありません。単純に“数”の問題です）。しかし、3期生は他の試験とのバランスもとりながら準備を進めなければなりません。（これは言語Aに限った話ではなく、他の科目でも試験が増えています。）もちろん、コロナ禍以前よりIBコースのある多くの学校では「元に戻った」だけなのですが、2023年度の試験は本校の生徒にとっても教員にとっても「未知への挑戦」となりました。「横浜国際高校IBコースの日本語の授業の紹介」「今後の授業改善のための活用」につながることを目的として、3期生の学習の様子と、フルセットに戻った最終試験に3期生たちがどのように挑んだのかを生徒の声も交えながら記述していきます。

### 2 文学作品の学習について

#### （1）作品選択について

コース全体を通じ、HLクラスでは文学作品6作品、SLクラスでは4作品を学びます。いくつかの条件はありますが、どのような作品を選ぶかは学校毎の判断にゆだねられています。古今東西、日本文学だけでなく、海外の作品（日本語に翻訳されたもの）も対象になりますから、組み合わせは膨大です。本校では高い意欲で学ぶ生徒が多くなるよう、学習の質や生徒の声を考慮に入れながら毎年作品のラインナップを変えています。IBコースは基本的にディスカッションやプレゼン中心の授業であるため、生徒が主体的に学習に取り組むことが求められます。そのため、生徒が作品自体に魅力を

感じる、ということが大きな動機付けになるのです。生徒の反応を見ながら、最終試験でどのような問題が出て柔軟に取り組めるラインナップになるよう、毎年担当の教員で話しあって作品を選んできました。村田沙耶香『コンビニ人間』の1作品を除き、3期生と1期生とで共通の作品はありません。もちろん、生徒が興味を持つ作品といっても、ハラハラドキドキのエンタメ作品を扱うわけではありません。シェイクスピア『マクベス』、遠藤周作『沈黙』といった純文学作品は、私生活で文学に接する機会の少ない高校生にとって「読み易い」ものではないようです。しかし最初は難解と思われても、クラスメイトや教師と一緒に考察を深めていくことで作品の価値と面白さに気づき、文学の本質と価値の普遍性に到達できるような作品選びを心がけています。「小説家ってなんでわざわざ難しく、わかりづらく書くんだろう。ストレートにメッセージを伝えてくればいいのに」と疑問（不満？）を持っていた生徒が探究を進めていくにつれ、作品の「難しさ」が世界や、社会、人間の「複雑さと単純さ（という逆説）」につながっていることに気付く姿を見ることは決して珍しくありません。

## （2）授業改善について

I Bコース設立時よりマイナーチェンジは重ねてきていますが、大きなポイントのみ記述します。

前述したように、授業は基本的に生徒同士のディスカッションやプレゼンを中心に進行します。ただ、ディスカッションをする際に課題がありました。それは作品についての印象やあいまいな記憶をもとにした議論に陥りがちだったということです。それによってどうしても感想の言い合いのようになってしまい、作品を精緻に分析し考察することができません。そこでディスカッションの対象を1～2ページに限定したり、テーマに関連する箇所をあらかじめ指定したりするようになりました。また、関連するテキスト（同じ作家の異なる作品、研究者の書いた作品論、作家の随筆文、時代背景や文化的背景がわかる文章、作品がはらむ社会問題についての新聞記事、漫画など）をできるだけ多く準備しておき、生徒の理解にあわせて必要と思われるものを共有しました。柔軟に教師による講義や教員と生徒との問答を取り入れることもしました。講義の内容は一般的な高校の小説の授業で行われるような、一つ一つの語句にこだわって読む、精読の授業をイメージしていただければと思います。（あくまで生徒主体であり、「最後には先生が全部教えてくれる」という依存心のようなものが生まれないう注意していたことは言うまでもありません。）ディスカッション、関連テキスト、講義、と作品世界の本質に通じる道筋を複数提示することできっかけをつかみ、作品について深い洞察を示す生徒たちが少しずつ増えてくるようになりました。

## （3）生徒の声（最終試験終了後の3期生のアンケートより抜粋。）

Aさん

主人公の発言や、（それまで理解を避けていた）比喩が何を意味するのかを解釈するために、自分の感性に頼るのではなく、作品の言葉に忠実に向き合い、根拠を

持って解釈してくことが大切だと知った。そのおかげで、作者の意図を見出す“苦しき”のようなものから解放され、純粋に文学を楽しもう、読んだ時に自分の心がどう動かされ、どのように感じたのか潜在的な心の動きにもっと着目してみようと思えるようになった。(中略) 文学作品と社会とのつながりについて考えられるようになった。それまで、主人公の感情の遷移にばかり着目して見えていなかったが、主人公の経験という社会的な事実と、主人公の内心を切り分けて、(?) 理解できるようになった。

Bさん

最終試験前の分析が一年生の頃からできていれば、と思うこともありますが、流石にそれは難易度が高すぎるので、「語り手」や「構成」といった観点の効果の軸を当時からしっかり理解できていたらより分析的になったのではないかと思います。私は個人的に小説を全く読むタイプではなかったのですが、IBの日本語を通して新たに読んでみようかなという気にはなっています。多分授業のように、分析的に読む癖は治らないと思いますが。私からしたらただの「小説」という作品にこれだけの意図や工夫が筆者によって創造されており、それらが読者によって効果的に伝達されたり、工夫を施しているという点は、とても新しく重大な発見でした。

### 3 非文学テキストの学習について

「言語と文学」では文学と同程度の時間をかけて非文学を探究します。IBが定義する「非文学テキスト」には数多くのテキストタイプ(文章形式)が含まれます。「広告」「インフォグラフィック」「インタビュー」「ブログ」といった言語表現・画像表現によるものから、「ミュージックビデオ」「ラジオ放送」のような聴覚表現や演出などを考察する必要があるものまで幅広くあります。

非文学テキストの探究にあたり生徒たちの課題となったのは大きく二つでした。一つ目はテキストの持つメッセージと作者の工夫の「関連」について考察を示せるようになることです。メッセージ(テキストが主に何を伝えているのか)とそれを伝えるための作者の工夫をばらばらに、箇条書きのように指摘することはできても、それがいかに有機的に「関連」しているか(作者の工夫のどのような点がメッセージの伝達にどのように寄与しているか)について踏み込んだ洞察を示すことは簡単ではありません。二つ目はどのようなテキストタイプ(それまで分析したことのないようなテキストタイプ)であっても、一定の理解を示せるようになることです。この2つの課題を乗り越える生徒にはいくつかの条件があるように見えます。①精読できるようになること(母語のテキストを読めているようで実は『読めていない』ことに気付くこと)、②テキストタイプの特徴に意識をはらい、それが対象とする読者(視聴者)と結びついていることに注意を払えるようになること、③テキストのもつメッセージとその工夫の関連性や形式

(テキストタイプ)と内容(テキストの持つ意味)が不可分な関係にあること(内容が形式を決定し、形式が内容を規定していること)に気付くこと、です。生徒たちがこれらの要素を満たせるよう、授業の基本的な枠組みが形づくられました。ほかにも、ポスターやテレビCMを創作することによって作り手側の視点に立つ経験を持ったり、グローバルな社会問題をはらむ文学作品と非文学テキストの関連について探究する際のテキストの選定に多様性を持たせる、などの取り組みを行っています。

#### 4 今後の授業改善に向けて

I Bコースの授業は徹底して生徒主体であるからこそ、理解のグラデーションがある生徒たちに対して、柔軟に授業の枠組みを調整していく必要があります。1～3期生の取り組みと結果から、ある程度授業のその方法論が固まってきたように思えますが、もちろん、まだまだ成長の余地があります。内部評価(個人口述)はかなり早い時期、2年次末に挑むこととなりますので、この時期までにテキストを理解する力を育てるにはどうすればよいか、限られた時間のなかで幅広いテキストタイプに触れるにはどうすればいいか、「概念理解」をもっと促進するような授業・「TOK」とのつながりをもっと意識できる授業をするにはどうすればいいのか、などです。

I Bコースの指導に携わって4年目の執筆者が考えるI Bの良い点は、最終評価と日ごろの授業が完全にリンクし、それが本質的な学びにつながっている、という点です。仮に「点数をとるための授業」を展開したとしても、それは最終的に言語と文学の普遍的な価値に気付くことにつながりますし、言語と文学の本質的な価値に気付いている生徒は必ずといっていいほど高い評価を得ています。他校の授業実践なども参考にしつつ、指導法の幅を広げ、より多くの生徒が言語と文学の本質的な価値に到達できるよう、授業改善を積み重ねていきます。